

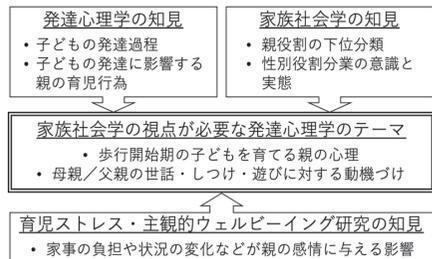
発達心理学における育児感情研究への家族社会学的視点の導入 — 歩行開始期の親の育児感情と母親／父親の動機づけの差異の解明に向けて —

大澤 直樹

1. はじめに

発達心理学の研究の基盤は、Piaget や Bowlby, Vygotsky などによる古典的理論にある。理論化するためには実践的な育児をある程度単純化しなければならず、保育所や幼稚園への登園を嫌がる子どもへの対応や共働き夫婦間の育児の分担のように、社会状況や文化の影響を強く受ける事象は研究対象となりにくい。また、子どもの心に注目する反面、心の発達に深い関連のない周辺の育児行為、たとえば食事の支度・清掃・洗濯などの「家事との隣接領域」の負担が親の心理に及ぼす影響は、これらの古典的理論の文脈では語られない。さらに、育児に対する親の意識は時代によって変化する。近年、日本国内において、従来の母親規範に加え「母親でありつつ自己実現を求める傾向」「完璧な子育て・母親像への希求」といった「新しい母親意識」が出現している(山根, 2008)実態や、父親の育児が奨励される社会状況の中、育児に不慣れな父親や「育児は母親の仕事」と考えている父親が母親とは異なる育児ストレスを感じている(冬木, 2008)実態が、家族社会学分野の研究により明らかになっている。近年の実践的な育児に特徴的な心理を解明するためには、発達心理学の古典的理論に基づいて得られた知見をベースとしつつ、近年の社会状況を分析し得られた知見を組み合わせることが必要である。

本稿では、歩行開始期の子どもを育てる親の複雑な育児感情、ならびに母親・父親の動機づけの差異について、発達心理学の知見に加え、家族社会学における二つの視点(親役割と性別役割分業意識)を導入することで、メカニズムの解明が進む可能性を提示する。なお、本稿における「育児」は、子どもに直接行う世話やしつけだけでなく、子どもを育てることによって影響を受ける、洗濯や掃除などの行為も含む。通常、発達心理学では育児は「子どもに直接行う行為」を指す概念である。しかし、母親／父親の心理とその差異を研究対象とする場合、子どもへの直接的な行為かどうかに関わらず、親が負担感などの感情を経験する可能性のある行為全体を分析する必要がある。そこで、まず「育児」に関係する家事などの幅広い事象が親の感情に大きな影響を与えている根拠として育児ストレス関連の研究を取り上げたうえで、発達心理学よりも「育児」の概念が広く、その下位構造に注目して夫婦間分担と育児心理との関係について研究が進んでいる家族社会学の視点を導入する必要性を示す。



2. 育児感情研究における発達心理学の基礎的な知見

発達心理学における親の位置づけ

心理学, 特に発達心理学における親の育児感情の研究は, 親の感情が養育行動にどのような影響を与えるのか, あるいは養育行動を通して子どもの発達にどのような影響を与えるのかということにその力点が置かれてきた。その中で親の役割に関する主な視点は二つあり, 一つは Bowlby の流れを受けた「愛着の対象としての親」で, もう一つは Vygotsky の流れを受けた「社会化エージェントとしての親」である。

「愛着の対象としての親」の役割が最も重要な時期は, 子どもの生理的欲求の充足が親に強く依存している時期, すなわち乳児期 (infancy) であろう。これは, Bowlby (1969 黒田他訳 1976) が愛着発達の段階を①人物弁別をとまなわない定位と発信 (0~12 週), ②ひとりまたは数人の弁別された人物に対する定位と発信 (12 週~6 か月), ③発信ならびに動作の手段による弁別された人物への接近の維持 (6 か月~2 歳または 3 歳), ④目標修正的協調性の形成 (3 歳~), とし, 第 3 段階になると子どもは明確に愛着を持っていると述べていることから推測できる。子どもは親に対して欲求をさまざまな形で伝え, 親は子どもが何を欲しているかを理解しケアを提供しようとする。この過程においては, 社会的愛着などのポジティブな社会的感情が, 分娩や授乳に関わるホルモンであるオキシトシン (Kosfeld, Heinrichs, Zak, Fischbacher, & Fehr, 2005) やベビースキーマの認知 (Glocker, Langlebenc, Ruparella, Lougheada, Valdeza, Griffina, Sachserb, & Gur, 2009) などによって引き起こされていることが明らかになっており, 世話の動機づけに影響を与えているとして注目されている。

一方, 「社会化エージェントとしての親」の役割が重要になるのは, 1 歳半~3 歳頃にあたる歩行開始期 (toddlerhood) である。この時期の子どもは自律性が高まるとともに, 養育者以外の他者とのつながりも増える (Edwards & Liu, 2005) ため, しつけ・教育の必要性が高まる。また, 生理的欲求の充足を親に依存する程度も乳児期と比べると低下しているため, 相対的に「社会化エージェントとしての親」の重要性が高まることになる。この視点では, 怒鳴る・たたくなどの「過剰反応的なしつけ行為」(overreactive discipline) (Arnold, O'Leary, Wolff, & Acker, 1993; 井淵, 2010) と親のネガティブな感情(怒り, 不安など)との関連が注目されており, 「愛着の対象としての親」とは対照的に, ネガティブな感情に関する研究が数多く行われている (Rueger, Katz, Risser, & Lovejoy, 2011; Teti & Cole, 2011)。

このように発達心理学における親の役割については二つの見方が存在するが, 実践的な育児, 特に乳児期を過ぎた子どもを育てる親の役割はその両方を併せ持ったものであり, 場面・状況によってもその役割は変化すると考えるのが自然である。したがって, 実践的な親の育児感情の仕組みを解明するためには, これら二つの役割の相互の関係性やその切り替わりのメカニズムについても検討し, 実証的な研究を蓄積する必要があるだろう。

育児感情とは何か

育児感情の定義 育児における感情を厳密に定義した研究は見当たらず, 用語自体も研究によってさまざまである。育児感情 (parenting affect/emotion), 育児ストレス (parenting stress), 育児不安といった比較的広義な概念を用いている研究がある一方, 親役割肯定感 (青木, 2009), 育児幸福感 (清水・関水・遠藤・落合, 2007) などの限定的な概念に注目した研究もある。研究の関

心を怒りや喜びなどの基礎的な感情におくか、社会的感情や自己認識に関係のある責任感や有意義感などにおくかによっても、用いられる語が異なっている。このような混沌とした状況は、親の育児心理の研究と感情心理学の研究が並行して同時期に発展してきたことが一因であると思われる。ポジティブ感情とネガティブ感情が分離されたのは Russell (1980) による「感情の次元説」以降であり、特にポジティブ感情への注目は Fredrickson (2001) や Seligman, Steen, Park, & Peterson (2005) などの研究を待たなければならなかった。一方、育児感情に関する主要な概念モデル (Belsky, 1984; Dix, 1991) が提唱されたのはこれとほぼ同時期である。その後感情に関連した用語の定義は育児心理研究の領域全体では見直されることなく今日に至っているが、隣接分野における感情研究の知見と融合を図るためには、感情心理学の知見に基づき、明確に定義する必要がある。本稿では、実践的な育児における親の役割意識や自己認識のはたらしに注目するため、育児中に感じる、あるいは育児行為に対して感じる、基礎的な感情、社会的な感情、自己認識に関わる感情を包括的に「育児感情」として扱う。なお国外研究で emotion の語を用いている箇所には、標準的な訳語である「情動」を当てている。

個人特性としての感情状態 現在までの発達心理学での育児における感情・情動研究の主な流れは二つある。一つは Belsky (1984) が提唱した養育行動の規定要因のプロセスモデルに基盤をおくものである。このモデルにおける育児感情は、一時的な感情・情動ではなく、親自身の生育歴や環境に継続的に影響を受ける比較的安定した感情特性を指しており、個人特性 (personality) の一部として捉えられるものである (Rueger et al., 2011)。彼は、親の人格的特性や子どもの気質とともに、夫婦関係・職業・社会的ネットワークによる親個人または育児行動に対するストレス／サポートが、直接的に、あるいは親の心理的ウェルビーイング (psychological well-being) を通して間接的に育児行動に影響を与えると考えた。ただし、このモデルは育児における親の感情を明確に位置づけるものではない。モデル自体にも affect や emotion という用語は用いられておらず、心理的ウェルビーイングが個人特性の一部に含まれているのみである。

一時的な感情・情動 もう一つの感情・情動研究の流れは、Dix (1991) が提唱した、日常的な育児中に親が感じる一時的な情動 (parenting emotion) と動機づけの変化に注目したモデルに基盤をおくものである。Dix (1991) は、情動の生起・制御、養育行動への影響のプロセスを説明するために、情動喚起 (activation) ・情動制御 (regulation) ・養育行動 (engagement) の三つの構成要素が相互に影響し合うモデルを提唱している。このモデルでは、育児に関する出来事の評価など文脈的な要因によって親の情動が喚起されることや、動機づけの影響が強調されている。たとえば、Dix (1991) は親の関心と子どもの行動による情動喚起の例として、「仕事のために家を出ようとする親が、準備をしない子どもを見てイライラする」ケースを挙げている。この場合、親は怒りが過度にならないように自らの感情をモニタリングしつつ (情動制御)、子どもの関心の持続よりも親の目標の達成に強く動機づけられ、怒りの感情を顔や声で表出したり、子どものモニタリングを強化したりすること (動機づけや養育行動への影響) が考えられる。

育児感情のアンビバレンス 一般的な感情については、感情を測定する尺度として多く用いられる PANAS (Positive and Negative Affect Scale) の標準化論文 (Watson, Clark, & Tellegen, 1988) でポジティブ／ネガティブ感情の負の相関が低いと報告されているように、喜びや怒りといった基本的なポジティブ／ネガティブ感情の 2 次元構造が認められている (山崎, 2006)。育児に

においてもポジティブ／ネガティブ感情のアンビバレンスが示唆されており、実践的な育児に即した研究で扱われる「育児に対する制約感」「育児に対する肯定感」といった自己意識に関わる感情についても、ポジティブ／ネガティブ感情を同時に経験していることが確認されている(たとえば柏木・若松(1994))。これらの知見は、親の状態に合わせた適切な育児支援を行うためには、親のネガティブな育児感情を和らげることを重視するのか、それともポジティブな育児感情を高めることを重視するのかを注意深く検討する必要があることを示唆している。

3. 実践的育児における親の感情に注目した研究

育児ストレスの研究

子どもの発達を中心的な問題として扱う伝統的な発達心理学では、家事の負担感や経済的不安などは子どもの発達に直接的な関係がない「育児の周縁的要素」とみなされ注目されてこなかった。しかし、育児ストレスの研究では、これらが親の心理に大きな影響を与えていることが明らかにされてきた。佐藤・菅原・戸田・島・北村(1994)は、Lazarus & Folkman (1984)のストレスと認知評価について考察し、母親の育児ストレスを「子どもや育児に関する出来事や状況などが、母親によって脅威であると知覚されることやその結果母親が経験する困難な状態」と定義した。育児ストレス研究の主なアプローチは、life event theory, daily hassle theory, P-C-R theory の三種類に分類される(Crnic & Low, 2002; Deater-Deckard, 2004)。これらはそれぞれ異なる種類のストレスに注目しているが、本質的には相補的な関係にあるとみられる。

一つ目の life event theory と呼ばれるアプローチは、一般的なストレス研究の初期のモデルに根拠をおくものである。育児においても親の離婚、経済的貧困、子どもの病気といった育児生活上の大きな困難は、親の抑うつや不適切な養育行動の原因とされ、life event theory が育児ストレスに適用されている(たとえば Crnic, Greenberg, & Slough, 1986)。しかし、これらのライフイベントは発生する頻度が少なく、また全ての親子に当てはまるものではないため、特に親子ともに非臨床領域の場合の育児ストレスを測定するにはあまり適さない。

二つ目の daily hassle theory と呼ばれるアプローチは、major life event アプローチの有用性を疑問視し minor daily hassle (日常的なささいなわずらわしさ)の蓄積が一般的な成人の精神的な健康に影響を与えることを示した Kanner, Coyne, Schaefer, & Lazarus (1981)によって確立された。Crnic & Greenberg (1990)はこの daily hassle theory を育児に適用した。多くの親が経験するであろう minor daily hassle をさらに parenting tasks (親の予定が修正を迫られる、子どもが汚した箇所を継続的に掃除するなど)と challenging behavior (口うるさく言わないと言うことを聞かない、寝ようとしないなど)に分類し、これらが育児の満足度に負の影響を与えることを示した。

三つ目のアプローチである P-C-R theory は、life event theory や daily hassle theory とは異なり、育児に特化したストレスモデルである。このアプローチではストレス要因を、親に起因するストレス(Parent)／子どもに起因するストレス(Child)／親子関係に起因するストレス(Relationship)の三つの領域に分類する。そして、それぞれの領域のストレスが高まると他の領域へも影響し、全体のストレスが高まると疾病等のリスクが増加すると考える(Deater-Deckard, 2004)。P-C-R theory を代表するストレス測定法としては、parenting stress index (PSI) (Abidin, 1983)が挙げられる。PSI の尺度項目は子どもに起因するストレス尺度と親に起因するストレス

尺度に分かれているが、子どもに関するストレス尺度は主にストレス因子の存在を問うものである一方、親に起因するストレスの下位尺度は、ストレス因子ではなくストレス反応に関する項目で構成されている。妥当性確認は原版(Abidin, 1983)・日本語版(奈良間・兼松・荒木・丸・中村・武田・白畑・工藤, 1999)ともに非臨床群・臨床群を区別しないサンプルで行われているが、最も頻繁に使用されているのは母親の抑うつなどの臨床領域である(Deater-Deckard, 2004)。

国内の育児不安研究

育児ストレスと関連して、日本国内では育児不安の研究が多く見られるのが特徴的である。育児不安の研究は、牧野(1982)をきっかけに日本で活発に行われるようになった。牧野(1982)の育児不安尺度は、職業疲労の研究から示唆を得たストレス兆候の調査のための尺度であり、概念として育児ストレスと重なる部分が多い。その後、さまざまな分野で育児不安の研究が行われてきたが、その定義は研究者により異なっており、ストレスと類似の概念としてとらえる研究者や、育児に関して感じる疲労感や意欲低下、育児困難感などとしてとらえる研究者などに大別される(吉田, 2012)。吉田(2012)によれば、後者は比較的母親の実態に即した研究によく見られる定義であるという。育児不安研究が日本で活発に行われている主な理由として、宮坂(2008)は、日本の母親が乳幼児の情緒的ケアを重視しているという育児の文化依存性を指摘している。また「不安」という感情語も文化依存的なものである点は重要である。日本では不安は憂うつに近い概念であるのに対し、欧米では不安(anxiety)は憂うつよりも恐怖(fear)に近い概念とされる(Imada, 1989)。したがって、日本の育児文化の実態に即した育児感情のメカニズムの解明には、育児ストレスだけでなく、育児不安への注目も必要であると考えられる。

育児と主観的ウェルビーイング(SWB)

主観的ウェルビーイング(SWB)研究の領域は、心理学分野でのネガティブ感情への過剰な傾倒への反応として発展してきた(Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999)。育児ストレスがネガティブ感情と親役割への悪影響にのみ注目しているのに対し、SWBによる育児研究は育児に対するポジティブな評価とネガティブな評価の両方に注目している。Diener(1984)は当時の幸福感研究をレビューし、①全体的な生活満足度に関する認知的判断、②人生に対するポジティブ感情、③人生に対するネガティブ感情、という三つの要素からなるSWBの構造を示した。この構造は現在に至るまで多くのSWB研究で検討されているものの、いまだ合意には至っていない(Busseri & Sadava, 2011)。育児に関する近年のSWB研究をレビューしたNelson, Kushlev, & Lyubomirsky(2014)によれば、SWBの構成要素または関連のある概念として、有意味感、進化論的な欲求の充足、心理的欲求の充足、ポジティブ/ネガティブな情動、睡眠不足、夫婦関係の緊張、経済的負担感などが検討されている。SWBに関連する要素は多様であり、モデルの確定にはまだ遠い状況である(Busseri & Sadava, 2011)。しかし、育児心理を解明するうえでポジティブ感情とネガティブ感情の関係性を単なるアンビバレンスとすることとどまらず検討することは非常に重要であり、継続的な発展が期待される研究領域である。

4. 家族社会学の知見から何を取り入れるか

家族社会学における育児研究

発達心理学と並んで、家族社会学でも多くの育児研究が行われてきた。母親の育児不安や父親

の育児関与が発達心理学と共通の問題意識として持たれているが、研究の視点についてはいくつかの点で大きく異なっている。発達心理学との最大の違いは、家族社会学においては、親の育児は金銭的報酬を伴わない「労働」として位置づけられてきた点である。子どもを無償でケアするタスクとその責任を社会の中で女性が負っているという「ケア論」と「性別役割分業」の問題が、家族社会学における育児研究のメインテーマである。そのため、家庭内外での育児の分担、就業と育児の両立／葛藤といった視点からの研究が多く行われている。多岐にわたる家族社会学の研究テーマの中で、発達心理学における親の育児心理の研究に取り入れるべき最も重要な視点は、親役割と性別役割分業に関する現実的な視点である。

タスクとしての親役割

役割理論は、主に社会学(あるいは社会心理学)の分野で議論されてきた。研究者によって「役割理論」の指す内容は一致していないものの(神谷, 2013)、役割という概念は、社会構造と個人をつなぎ、行動を説明するものとして重要視されている(栗岡, 1980)。親役割の研究は海外でも多く見られるが、日本人はアメリカ人と比べて個人のアイデンティティより役割を重視する傾向が強く、積極的に役割を取得しその役割に適応することが達成目標となっている(東, 1994)。そのため、育児行動においても親としての規範意識が大きな影響を及ぼしていると予想される。したがって、日本人の親の心理を研究するにあたっては特に、家族社会学の親役割の概念を導入する意義は大きい。

発達心理学の親役割は子ども視点での分類(愛着の対象としての親／社会化エージェントとしての親)であるのに対し、家族社会学における親役割は親視点での分類である。そのため、親の心理を研究するうえで、発達心理学の親役割の概念よりも、家族社会学の親役割の概念を用いるのが適当であろう。家族社会学では育児を明確に「労働」と位置づけることによって、育児に関連する具体的なタスクを洗い出し、そのタスクの性質や分担の現状などをもとに役割の下位構造の分析が行われている。

家族社会学では育児に関するタスク全般、すなわち子どもの身体的な健康の管理から育児に関係する家事に至るまで、子どもがいる夫婦の家庭内タスクと子どもがいない夫婦の家庭内タスクの差分全体が、育児のタスク、すなわち「親役割」に含まれる。親役割の下位構造は国内研究によっていくつかの提案がなされている。家族社会学での親役割の定義に関する大和(2008)・巽(2018)の考察を参考に、先行研究における代表的な下位構造のバリエーションを筆者が整理したものを表1に示した。表1における《直接的親役割》《間接的親役割》は、子どもとのコミュニケーションがその役割の達成に必須であるかどうかを基準として、下位構造の要素を筆者が独自に分類したものである。しつけや育児に関連する家事、子どもの扶養を親役割に含めるかどうかについては研究者間で若干の差異があるが、親の感情はしつけ・家事・扶養のいずれとも関係があると考えられるため、育児心理の研究に適用する親役割構造としては、最小公倍数的な分類を採用すべきであろう。発達心理学における「愛着の対象としての親」は(a)(c)に、「社会化エージェントとしての親」は(b)(c)におおよそ該当すると考えられる。子どもの発達に直接的な関係のない親役割である(d)(e)は発達心理学の多くの研究(特に子どもの発達や養育行動に注目した研究)ではあまり扱われないが、親の心理に影響を与える要因を研究する場合には(d)(e)も含めることでより網羅的なアプローチになるだろう。

表1 家族社会学における親役割の下位構造の比較

	親役割／主な内容				
	《直接的親役割》			《間接的親役割》	
	(a)世話	(b)社会化	(c)交流(遊び)	(d)家事	(e)扶養
	食事・排泄の補助	しつけ・教育	遊び相手・話し相手	洗濯・掃除	就業による稼得
船橋(1998)	○	○	○	—	○
牧野(2005)	○	—	○	○	—
多賀(2005)	○	○	—	—	—
大和(2008)	○	○	○	—	—
巽(2018)	○	—	○	—	—

性別役割分業の意識と育児の分担の実態

ジェンダー研究は家族社会学において、理論構築と実証研究の両面で大きな貢献をなしてきた。特に実証研究においては母親・父親役割に関する実態調査が多く行われている(山根, 1998)。日本の父親の育児の実態調査をレビューした大野・柏木(2008)によれば、父親の育児に関する価値観が多様化し、世話役割に対する意識の高い父親も増加しつつあるものの、親役割の下位の要素のうち「交流」特に「遊び」を担当する父親が多く、「世話」を行う父親は少ないことが明らかになっている。欧米との比較調査を行った船橋(1998)によれば、日本の父親は欧米の父親と比べて「世話」の分担割合が少なかったが、「遊び」に関しては同等に行っている。また、松田(2006)は父親の「世話」と「遊び」への関与の規定要因を分析し、父親の労働時間が減少しても父親の「世話」が増加しないのに対し「遊び」は増加すること、また家計における母親の収入割合が増加しても父親の「世話」は増加しないのに対し「遊び」は増加することなどを明らかにしている。したがって、心理学において父親の育児に関する動機づけに関連して生じる感情・情動を考えるうえでは、少なくとも「世話」と「遊び」を明確に分離する必要があるということになる。大和(2008)は、「収入貢献度」が高い母親の場合は父親の「世話」が母親の感じる夫婦関係満足度を高め、「収入貢献度」が低い母親の場合は父親の「遊び」が母親の感じる夫婦関係満足度を高めることを示している。これは、父親のみならず、母親についても性別役割分業の意識が育児感情に影響を与えていることを示唆する。

5. 家族社会的視点の導入が必要な発達心理学の研究テーマ

テーマ1：歩行開始期の子どもを育てる親の心理

歩行開始期の特徴 乳児期から幼児期への移行期である歩行開始期は、「日常生活における自律性と独立性の獲得」「自己概念の獲得」「衝動または情動の制御」などの発達課題を達成する必要があるとされる時期であり、近年では独立した発達段階として認められることが多い(Edwards & Liu, 2005)。これらの発達課題はあくまでも「子どもの発達課題」ではあるが、社会化エージェントとしての役割を持つ親にとっては、同時に「養育者自身の課題」でもあり、責任感を感じるようになる。

親の葛藤 この時期の子どもは自力で生活を営むことができないため、親は食事・入浴・排泄などの補助を始めとする子どもの世話を行わなくてはならない。その一方で、子どもは「○ ○したくない」「自分でやりたい」などの自己主張をするようになる。発達心理学における「愛

着の対象としての親」は、子どもの欲求を満たすことでその役割を達成する。しかし子どもの好きなようにさせるだけでは子どもの健康が維持できないため、子どもの要求していない世話も行わなくてはならない。子どもの自主性を尊重するという親の責任と、子どもの健康を維持するという親の責任は同時に果たすことができず、強いネガティブ感情を経験する。このような「両義性」(鯨岡, 2002)あるいは「枠組みの絡み合い」(高濱・渡辺・坂上・高辻・野澤, 2008)は、「愛着の対象としての親」や「社会化エージェントとしての親」という文脈では語られることのない育児の心理である。このような葛藤の構造は、発達心理学の親役割の概念のもとでは質的にしか表現ができないが、先に定義した家族社会学における親役割の下位構造を用いれば、「交流」と「世話」の役割間葛藤としてとらえることができ、量的な分析対象となりうる。

歩行開始期の育児ストレス 先に挙げた三つの育児ストレス研究のアプローチのうち、この時期の育児ストレスを最も確にとらえていると思われるのは、*daily hassle theory* である。自律性を獲得し始め、しかしながら情動制御や向社会性、規範の獲得が不十分である子どもの生活は、まだ大人の生活のルールに合うものにはならない。歩行開始期には、トイレトレーニングや子どもの頑固な「イヤ」への我慢など、困難な *parenting task* が他の時期の育児と比べて増加するという (Ballenski & Cook, 1982)。また、生活スキルが未熟であるにも関わらず自律性を獲得し始めたこの時期の子どもの行動は、親にとってはまさに *challenging behavior* である。「口うるさく言わないということをきかない」といった尺度項目は、歩行開始期の特徴である不従順行動によくあてはまる。

顕著なアンビバレンス 歩行開始期の子どもを育てる親は、役割葛藤や日常的な育児ストレスが高まることで強いネガティブ感情を経験していると考えられる。他方、子どもの急速な発達を目にすることでポジティブ感情も持続的に強く感じている可能性がある。この時期は、運動性やコミュニケーション能力が向上し、自分自身のアイデンティティが獲得されるなど、子どもが急速に発達・変化する時期である (Edwards & Liu, 2005)。一般的に、多様性は持続的な主観的ウェルビーイングの重要な予測因子であることが知られている (Sheldon, Boehm, & Lyubomirsky, 2013)。子どもの急速な発達と行動の多様化は、親がポジティブな刺激に慣れるのを防ぎ、主観的ウェルビーイングに対して持続的にポジティブな影響を与える可能性が高い (Nelson et al., 2014)。興味深いことに、歩行開始期の乳幼児の不従順行動は日本では減少しているという (坂上・金丸・武田(六角), 2016)。これは、母親の子どもとの対立や葛藤を避ける傾向が強まっているためと解釈されている。歩行開始期の子どもを育てる親のポジティブ／ネガティブ感情の発現メカニズムの解明が進めば、坂上 (2018) が危惧しているようなネガティブ面への過剰な注目を防ぎ、子育てに前向きになれる親が増えることも期待できると思われる。歩行開始期は親による育児の環境に大きな変化が起こる時期であり、また子どもに対する評価が多様化する時期でもある (高濱他, 2008)。個々の親の状態とその変化に合わせたオーダーメイドの支援を行うためには、親の心理を複雑化させている親役割の葛藤構造を明確にし、反抗期の子育てを親視点でとらえなおす試みが必要である。

テーマ2：母親／父親の育児に対する動機づけの比較

動機づけ研究の重要性 動機づけの研究は感情・認知・欲求などの概念を統合し包括的に理解しようとする試みであり (上淵, 2004)、育児においても重要である。しかし、親の育児に対す

る動機づけの研究は、発達心理学の分野では積極的に行われてこなかった。近年では動機づけを扱った研究はいくつか報告されているが(Dix, Gershoff, Meunier, & Miller, 2004; Hajal, Teti, Cole, & Ram, 2019; Jungert, Landry, Joussemet, Mageau, Gingras, & Koestner, 2015), いずれも親の動機づけ自体の解明ではなく、親の養育行動や子どもの発達への影響に注目したものである。

母親の動機づけ 母親の育児動機づけ、特に虐待等のない非臨床領域の母親の育児動機づけについては、発達心理学ではほぼ自明とされることが多いが、家族社会学では「母親規範」の研究が活発に行われている(山根, 2008)。家族・育児はオープンなシステムであり、家族外の情報(文化、時代、言説、社会状況など)によって大きく影響を受けるとされる。日本では乳幼児の精神的ケアが母親の役割として重視されるのに対し、同じアジアでも台湾やシンガポールでは教育の役割が重要視されることがわかっている(宮坂, 2008)。また 1960 年代に形成された「3歳児神話」は 1970 年代の母親に影響を与え、母性強調の時代を形作った(宮坂, 2008)。さらに 1990 年代から 2000 年代に入ると、育児意識が専業主婦家庭と共働き家庭で親役割に関する意識が二分化される傾向が見られるようになった(山根, 2008)。このような母親の価値観や信念は、動機づけ(上淵, 2004)や育児ストレス(Crnic & Low, 2002)に影響を与える。たとえば、母親が育児を一人で行うことに対して、母親の「子どもが幼いうちは母親が育児に専念すべき」という育児観が強いほど母親はポジティブ感情を強く感じる事が予想され、他方、母親の「母親・父親が平等に育児をすべき」という育児観が強いほど母親はネガティブ感情を強く感じる事が予想される。このように時代や文化、社会状況によって移り変わる現実的な親の心のメカニズムを解き明かすためには、家族社会学の視点を取り入れることが不可欠である。

父親の動機づけ 父親の育児に関する動機づけは、父親の育児関与をどうしたら増やせるかという共通の問題意識のもと、最近研究が活発に行われるようになってきた。心理学の分野では、父親の動機づけに、育児に関する性別役割分業意識および自己認識が関係していることが示されている(レビューとして Pleck, 2012)。一方、家族社会学の分野では、父親の育児の目的を①楽しむため、②父親の自己実現のため、③妻の負担軽減のため、④子どもの発達のため、と分析しており、規範意識を軸とした母親の目的意識とは大きく異なることが示されている(斧出, 2008)。Belsky (1984)や Dix (1991)の育児感情のモデルは母親・父親共通のものであったが、現実的な母親・父親の育児の育児意識の差異を考えると、動機づけのメカニズムの差異も検討すべき課題である。さらに、父親の育児は食事や排泄の補助などの日常の世話よりも遊びへの関与が多いことを考慮すると、親役割の構成要素(世話・社会化・交流・扶養・家事)により父親の動機づけが異なる可能性もある。たとえば、「世話」と「遊び」では父親の育児関与の規定要因が異なるという(松田, 2006)。さらに、加藤・黒澤・神谷(2014)によれば、父親が関与する子育てを「世話」と「遊び」に分けて検討した場合、父親による「世話」への関与が増加すると、父親の育児関与に対する母親の阻害行動が増加するという。したがって、現実場面での親の心理を明らかにするには家族をシステムとして捉える必要があり、そのためには親役割の下位構造および母親・父親の性別役割分業意識の違いを組み込んだモデルを提案しなければならない。

6. おわりに

本稿では、家族社会学の二つの視点(親役割の下位構造・性別役割分業意識)の導入が必要な

発達心理学上のテーマとして、歩行開始期の親の育児感情と、母親／父親の育児に対する動機づけの比較を提示した。心理学では、社会状況や時代・文化に影響されない普遍的な心のメカニズムの解明に重点が置かれる。しかし、社会の影響を強く受ける実践的な育児に関しては、現実の親の心理メカニズムの非常に限られた側面のみ注目するバイアスともなりうる。家族社会学における親役割の下位構造や、規範意識の母親・父親による違いといった視点を導入することで、実践的な育児における心理、特に親役割内の葛藤や、感情の生起を含む動機づけメカニズムの包括的な解明につながる可能性がある。

学際的研究を行う難しさは、概念・用語のずれをどう修正あるいは翻訳するか、研究の方法論の違いをどこまで許容し、価値を認められるかなどの点にある。たとえば、「感情」の定義は情動・気分やストレスと区別される心理学のほうが厳密であるが、「育児」の定義についてはしつけや家事を含めるか否かが議論されている家族社会学のほうが厳密である。今後の実践的な育児心理の研究においては、個々の研究が対象とするケース・局面を適切に限定することによってこのような課題をクリアしていくとともに、学際的アプローチを採用できる研究者やレビューアーを研究者コミュニティ全体で養成していくことも必要である。

文献

- Abidin, R. R. (1983). *The parenting stress index*. Charlottesville, VA: Pediatric Psychology Press.
- Arnold, D. S., O'Leary, S. G., Wolff, L. S., & Acker, M. M. (1993). The Parenting Scale: A measure of dysfunctional parenting in discipline situations. *Psychological Assessment*, 5(2), 137.
- 青木聡子 (2009). 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因——育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して—— 発達心理学研究, 20(4), 382-392.
- 東洋 (1994). 日本人のしつけと教育——発達の日米比較にもとづいて—— シリーズ人間の発達 (Vol. 12) 東京大学出版会
- Ballenski, C. B., & Cook, A. S. (1982). Mothers' perceptions of their competence in managing selected parenting tasks. *Family Relations*, 31(4), 489-494.
- Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 83-96.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. I: Attachment*. New York: Basic Books.
- (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子(訳)(1976). 母子関係の理論——I 愛着行動—— 岩崎学術出版社)
- Busseri, M. A., & Sadava, S. W. (2011). A review of the tripartite structure of subjective well-being: Implications for conceptualization, operationalization, analysis, and synthesis. *Personality and Social Psychology Review*, 15(3), 290-314.
- Crníc, K. A., & Greenberg, M. T. (1990). Minor parenting stresses with young children. *Child Development*, 61(5), 1628-1637.
- Crníc, K. A., Greenberg, M. T., & Slough, N. M. (1986). Early stress and social support influences on mothers' and high-risk infants' functioning in late infancy. *Infant Mental Health Journal*, 7(1), 19-33.

- Crníc, K. A., & Low, C. (2002). Everyday stresses and parenting. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of Parenting Volume 5 Practical Issues in Parenting*. 2nd ed. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, pp. 243–268.
- Deater-Deckard, K. (2004). *Parenting stress*. New Haven and London: Yale University Press.
- Diener, E. (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95(3), 542.
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125(2), 276.
- Dix, T. (1991). The affective organization of parenting: Adaptive and maladaptive processes. *Psychological Bulletin*, 110(1), 3.
- Dix, T., Gershoff, E. T., Meunier, L. N., & Miller, P. C. (2004). The affective structure of supportive parenting: depressive symptoms, immediate emotions, and child-oriented motivation. *Developmental Psychology*, 40(6), 1212.
- Edwards, C. P., & Liu, W. (2005). Parenting toddlers. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of Parenting. Vol.1 Children and Parenting*. 2nd ed. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, pp. 45–71.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. *American Psychologist*, 56(3), 218.
- 船橋恵子 (1998). 現代父親役割の比較社会的検討 比較家族史学会(監修), 黒柳晴夫・山本正和・若尾祐司(編) シリーズ比較家族第II期2 父親と家族——父性を問う—— 早稲田大学出版会 pp. 136–168.
- 冬木春子 (2008). 父親の育児ストレス 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子(編) 男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ—— 昭和堂 pp. 25–44.
- Glocker, M. L., Langleben, D. D., Ruparel, K., Loughhead, J. W., Valdez, J. N., Griffin, M. D., Sachser, N., & Gur, R. C. (2009). Baby schema modulates the brain reward system in nulliparous women. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 106(22), 9115–9119.
- Hajal, N. J., Teti, D. M., Cole, P. M., & Ram, N. (2019). Maternal emotion, motivation, and regulation during real-world parenting challenges. *Journal of Family Psychology*, 33(1), 109.
- Imada, H. (1989). Cross-language comparisons of emotional terms with special reference to the concept of anxiety. *Japanese Psychological Research*, 31(1), 10–19.
- 井濶知美 (2010). Parenting Scale 日本語版の作成および因子構造の検討 心理学研究, 81(5), 446–452.
- Jungert, T., Landry, R., Joussemet, M., Mageau, G., Gingras, I., & Koestner, R. (2015). Autonomous and Controlled Motivation for Parenting: Associations with Parent and Child Outcomes. *Journal of Child & Family Studies*, 24(7), 1932–1942.
- 神谷哲司 (2013). 育児期夫婦のペア・データによる家庭内役割観タイプの検討——役割観の異なる類型化と夫婦の関係性の視点から—— 発達心理学研究, 24(3), 238–249.
- Kanner, A. D., Coyne, J. C., Schaefer, C., & Lazarus, R. S. (1981). Comparison of two modes of stress measurement: Daily hassles and uplifts versus major life events. *Journal of Behavioral Medicine*, 4(1), 1–39.

- Kosfeld, M., Heinrichs, M., Zak, P. J., Fischbacher, U., & Fehr, E. (2005). Oxytocin increases trust in humans. *Nature*, 435(7042), 673.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達——生涯発達の視点から親を研究する試み—— 発達心理学研究, 5(1), 72-83.
- 加藤道代・黒澤泰・神谷哲司 (2014). コペアレンティング——子育て研究におけるもうひとつの枠組み—— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63(1), 83-102.
- 鯨岡峻 (2002). 「育てられる者」から「育てる者」へ——関係発達の視点から—— NHK ブックス (Vol. 938) 日本放送出版協会
- 栗岡幹英 (1980). 役割理論の一傾向——現象学的方法の導入について—— ソシオロジ, 25(1), 37-53, 129.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer publishing company.
- 牧野カツコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活とく育児不安> 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.
- 牧野カツコ (2005). 子育てに不安を感じる親たちへ——少子化家族のなかの育児不安—— *Minerva women's library* (Vol. 6) ミネルヴァ書房
- 松田茂樹 (2006). 近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化 (特集 ワーク・ライフ・バランス) 家計経済研究, 71, 45-54.
- 宮坂靖子 (2008). 育児の歴史——父親・母親をめぐる育児戦略—— 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子(編) 男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ—— 昭和堂 pp. 25-44.
- 奈良間美保・兼松百合子・荒木暁子・丸光恵・中村伸枝・武田淳子・白畑範子・工藤美子 (1999). 日本版 Parenting Stress Index(PSI)の信頼性・妥当性の検討 小児保健研究, 58(5), 610-616.
- Nelson, S. K., Kushlev, K., & Lyubomirsky, S. (2014). The pains and pleasures of parenting: When, why, and how is parenthood associated with more or less well-being? *Psychological Bulletin*, 140(3), 846.
- 大野祥子・柏木恵子 (2008). 親としての男性——父にはなるが、父はしない? —— 大野祥子・柏木恵子(編) 日本の男性の心理学——もう一つのジェンダー問題—— 有斐閣 pp. 153-173.
- 斧出節子 (2008). なぜ父親は育児をするのか? 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子(編) 男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ—— 昭和堂 pp. 91-114.
- Pleck, J. H. (2012). Integrating father involvement in parenting research. *Parenting: Science and Practice*, 12(2-3), 243-253.
- Rueger, S. Y., Katz, R. L., Risser, H. J., & Lovejoy, M. C. (2011). Relations between parental affect and parenting behaviors: A meta-analytic review. *Parenting: Science and Practice*, 11(1), 1-33.
- Russell, J. A. (1980). A circumplex model of affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39(6), 1161.
- 坂上裕子 (2018). 「イヤイヤ期」再考 (特集 反抗期再考) 教育と医学, 66(12), 1068-1075.
- 坂上裕子・金丸智美・武田(六角)洋子 (2016). 片付け課題における2歳児の従順行動・不従順行動の経年変化——2004・2005年度と2010・2011年度の比較から—— 発達心理学研究, 27(4), 368-378.

- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則 (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, **64**(6), 409-416.
- Seligman, M. E. P., Steen, T. A., Park, N., & Peterson, C. (2005). Positive psychology progress: empirical validation of interventions. *American Psychologist*, **60**(5), 410.
- Sheldon, K. M., Boehm, J., & Lyubomirsky, S. (2013). Variety is the spice of happiness: The hedonic adaptation prevention model. In S. A. David, I. Boniwell, & A. C. Ayers (Eds.), *Oxford Handbook of Happiness*. Oxford, England: Oxford University Press. pp. 901-914.
- 清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子・落合富美江 (2007). 母親の育児幸福感——尺度の開発と妥当性の検討—— 日本看護科学会誌, **27**(2), 15-24.
- 多賀太 (2005). 性別役割分業が否定される中での父親役割 フォーラム現代社会学, **4**, 48-56.
- 高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野澤祥子 (2008). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス——母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係—— 発達心理学研究, **19**(2), 121-131.
- 巽真理子 (2018). イクメンじゃない「父親の子育て」——現代日本における父親の男らしさと「ケアとしての子育て」—— 晃洋書房
- Teti, D. M., & Cole, P. M. (2011). Parenting at risk: New perspectives, new approaches. *Journal of Family Psychology*, **25**(5), 625.
- 上淵寿 (2004). 動機づけ研究の最前線 北大路書房
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: the PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**(6), 1063.
- 山根真理 (1998). 家族社会学におけるジェンダー研究の展開——1970年代以降のレビュー—— 家族社会学研究, **10**(10), 5-29, 154.
- 山根真理 (2008). 「次世代育成支援」時代の母親意識——母たちの意識は変わったか?—— 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子(編) 男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ—— 昭和堂 pp. 69-89.
- 大和礼子 (2008). ”世話/しつけ/遊ぶ”父と”母親だけでない自分”を求める母 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子(編) 男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ—— 昭和堂 pp. 1-24.
- 山崎勝之 (2006). ポジティブ感情の役割——その現象と機序—— パーソナリティ研究, **14**(3), 305-321.
- 吉田弘道 (2012). 育児不安研究の現状と課題 専修人間科学論集 心理学篇, **2**, 1-8.

(教育方法学・発達科学コース 博士後期課程1回生)

(受稿 2019年8月30日, 改稿 2020年1月8日, 受理 2020年1月13日)

発達心理学における育児感情研究への家族社会学的視点の導入

—歩行開始期の親の育児感情と母親／父親の動機づけの差異の解明に向けて—

大澤 直樹

乳幼児を育てる親の育児感情のメカニズムの解明は、近年、発達心理学における重要なテーマの一つとなっている。しかし、発達心理学は伝統的に子どもの心理発達に注目しており、育児行動を親の視点で分類する枠組みを持っていない。特に、現代の日本社会に特有の親の心理メカニズムの解明は遅れている。育児感情に関連した学際的概念である育児ストレスや主観的ウェルビーイングの研究領域では、現実的な親の心の動きを捉えるべく多様なアプローチがとられており、ここ30年ほどの間に多くの研究が行われてきた。また、家族社会学において育児は明確に親視点で分析されており、親役割と性別役割分業意識に関する多くの調査結果が蓄積されている。歩行開始期の子どもを育てる親の感情の構造や、夫婦で育児をする親の動機づけの構造は特に複雑であり、これらの理解のためには家族社会学の知見を積極的に導入したアプローチが必要であろう。

Introduction of Perspective of Family Sociology to Parenting Affect/Emotion Studies in Developmental Psychology: Toward Understanding Affective Structure in Toddler's Parents and Difference in Maternal/Paternal Motivation

OSAWA Naoki

Understanding the affective/emotional mechanism of parents raising infants and toddlers has become an important theme in developmental psychology. However, developmental psychology has traditionally focused on the psychological development of children and does not have a framework for classifying parenting behavior from the viewpoint of the parents. Especially, there is little understanding of the mechanism of parenting affect/emotion which is unique to modern Japanese society. In the research area of parenting stress and subjective well-being, which are multidisciplinary concepts related to parenting affect/emotion, various approaches have been taken to describe parents' affect/emotion, and many studies have been conducted over the past 30 years. In family sociology, parenting is clearly analyzed from the viewpoint of the parents, and there have been many surveys regarding parental and gender roles. The affective/emotional structure of parents raising their children in the toddler period and the motivational structure of coparenting are particularly complex. Therefore, an approach that positively introduces knowledge of family sociology is necessary to understand these aspects.

キーワード：育児感情，育児の動機づけ，親役割，性別役割分業

Keywords: parenting affect/emotion, parenting motivation, parental role, gender role